

明倫短期大学学会 月例研究会報告

平成27年度明倫短期大学学会月例研究会は、平成27年4月23日の第73回から10月22日の第78回まで計6回開催された。14年目を迎えた当学会研究会における総演題数は146に上った（通算回数は前身の明倫短期大学研究会からのカウント）、歴年の演題名等は学会HPをご参照下さい。

第73回（通算第156回）：2015年4月23日（木）

（座長：江川広子）

歯科技工における私の「ちょっとした工夫」と「こだわり」

伊藤圭一（歯科技工士学科）

歯科技工を行う際に、他者に説明することが難しい自分だけの技術的な「工夫」や「こだわり」がある。それらが、日々製作する歯科技工装置の品質を向上させるとともに、モノ作りへのモチベーションを維持させると考える。このような考えのもと、学生自身が楽しんで技工技術を向上させることができるクラブを立ち上げることを企画した。クラブ活動の内容は、歯科技工技術を活用した自由課題の装置やアクセサリを製作することである。今回は、クラブを立ち上げる機会に、自分自身の歯科技工における「工夫」と「こだわり」をまとめて報告した。

小学校における親子ブラッシング教室参加者の歯科保健行動の実態

渡邊美幸（歯科衛生士学科）

本学では、某小学校3年生のPTAが企画する「親子ブラッシング教室」において歯科保健教育実習を実施している。親子参加や学校歯科医の同席など、他校とは異なった取り組みをしており、保護者を通じ、児童の歯科保健行動の変容が期待できる。そこで、平成26年11月27日本教室に参加した保護者21名を対象にアンケートを行い、家庭における歯科保健行動の現状を把握するとともに今後の課題について検討した。子どもへの仕上げ磨き実施状況は毎日するが23.8%、時々するが42.9%、していないが33.3%であった。混合歯列期で、ブラッシングが難しい時期であるのにも関わらず、子どもに任せている保護者が多い結果であった。またフロスの使用についても毎日使用するが9.5%と少なく、保護者への指導の強化が必要と感じた。

本教室において保護者に対し、正しい歯科的知識を提供し、予防意識を向上させることが重要であり、今後も養護教諭や学校歯科医と連携を図り、歯科保健行動の変容につながるよう内容を充実させていきたい。

第74回（通算第157回）：2015年5月28日（木）

（座長：植木一範）

練習用顎模型を活用した歯周ポケット測定実習の取り組み

小野真奈美（歯科衛生士学科）

歯周組織検査は高い技術と精度が要求される。そこで、練習用顎模型を使用し深い歯周ポケットの測定実習を行っている。測定技術の向上を目指し、実習方法の見直しを行った。対象は、歯科衛生士学科学生66名である。練習用顎模型を使用し歯周ポケット測定を6点法で行った。実習は4回（1日2回×2日）実施し、測定に要した時間の測定とメーカー提示の正答にて正答率を求めた。その結果、全学生の回数別歯周ポケット測定値の正答率は、1回目（41.4%）に比べ4回目（44.6%）が有意に高かった（ $p<0.05$ ）。歯周ポケット値の部位別正答率は、最も高かった部位は33—43唇面および24—27口蓋面であり、最も低かった部位は44—47頬側面および13—23口蓋面であった。歯周ポケット測定時間においても1回目（37.8分）に比べ4回目（26.4分）は有意に短縮した（ $p<0.05$ ）。繰り返しの訓練により、測定技術の向上が認められた。今後は、1回の実習ごとに解答とフィードバックを行い、更なる測定技術の向上を目指していきたい。また、学科成績と正答率には有意な相関が認められたことから、講義内容の更なる充実をはかり、知識の定着に繋げていきたいと考える。

西区在宅医療ネットワークで歯科衛生士に求められるものは？

小林 梢（附属歯科診療所）

我が国は現在、総人口に占める65歳以上人口の割合（高齢化率）は26.0%、そのうち後期高齢者は12.5%を占める高齢化社会となっている。

高齢化に伴い社会は、要介護者が増え、介護者が減る。認知症が増え、独居が増える。この状態を打開するには健康寿命を延伸して、平均寿命に近づけることが求められ、施設中心の医療・介護から、可能な限り、住み慣

明倫短期大学学会 月例研究会報告

平成27年度明倫短期大学学会月例研究会は、平成27年4月23日の第73回から10月22日の第78回まで計6回開催された。14年目を迎えた当学会研究会における総演題数は146に上った(通算回数は前身の明倫短期大学研究会からのカウント)。歴年の演題名等は学会HPをご参照下さい。

第73回(通算第156回):2015年4月23日(木)

(座長:江川広子)

歯科技工における私の「ちょっとした工夫」と「こだわり」

伊藤圭一(歯科技工士学科)

歯科技工を行う際に、他者に説明することが難しい自分だけの技術的な「工夫」や「こだわり」がある。それらが、日々製作する歯科技工装置の品質を向上させるとともに、モノ作りへのモチベーションを維持させると考える。このような考えのもと、学生自身が楽しんで技工技術を向上させることができるクラブを立ち上げることを企画した。クラブ活動の内容は、歯科技工技術を活用した自由課題の装置やアクセサリを製作することである。今回は、クラブを立ち上げる機会に、自分自身の歯科技工における「工夫」と「こだわり」をまとめて報告した。

小学校における親子ブラッシング教室参加者の歯科保健行動の実態

渡邊美幸(歯科衛生士学科)

本学では、某小学校3年生のPTAが企画する「親子ブラッシング教室」において歯科保健教育実習を実施している。親子参加や学校歯科医の同席など、他校とは異なった取り組みをしており、保護者を通じ、児童の歯科保健行動の変容が期待できる。そこで、平成26年11月27日本教室に参加した保護者21名を対象にアンケートを行い、家庭における歯科保健行動の現状を把握するとともに今後の課題について検討した。子どもへの仕上げ磨き実施状況は毎日するが23.8%、時々するが42.9%、していないが33.3%であった。混合歯列期で、ブラッシングが難しい時期であるのにも関わらず、子どもに任せている保護者が多い結果であった。またフロスの使用についても毎日使用するが9.5%と少なく、保護者への指導の強化が必要と感じた。

本教室において保護者に対し、正しい歯科の知識を提供し、予防意識を向上させることが重要であり、今後も養護教諭や学校歯科医と連携を図り、歯科保健行動の変容につながるよう内容を充実させていきたい。

第74回(通算第157回):2015年5月28日(木)

(座長:植木一範)

練習用顎模型を活用した歯周ポケット測定実習の取組み

小野真奈美(歯科衛生士学科)

歯周組織検査は高い技術と精度が要求される。そこで、練習用顎模型を使用し深い歯周ポケットの測定実習を行っている。測定技術の向上を目指し、実習方法の見直しを行った。対象は、歯科衛生士学科学生66名である。練習用顎模型を使用し歯周ポケット測定を6点法で行った。実習は4回(1日2回×2日)実施し、測定に要した時間の測定とメーカー提示の正答にて正答率を求めた。その結果、全学生の回数別歯周ポケット測定値の正答率は、1回目(41.4%)に比べ4回目(44.6%)が有意に高かった($p<0.05$)。歯周ポケット値の部位別正答率は、最も高かった部位は33-43唇面および24-27口蓋面であり、最も低かった部位は44-47頬側面および13-23口蓋面であった。歯周ポケット測定時間においても1回目(37.8分)に比べ4回目(26.4分)は有意に短縮した($p<0.05$)。繰返しの訓練により、測定技術の向上が認められた。今後は、1回の実習ごとに解答とフィードバックを行い、更なる測定技術の向上を目指していきたい。また、学科成績と正答率には有意な相関が認められたことから、講義内容の更なる充実をはかり、知識の定着に繋げていきたいと考える。

西区在宅医療ネットワークで歯科衛生士に求められるものは?

小林 梢(附属歯科診療所)

我が国は現在、総人口に占める65歳以上人口の割合(高齢化率)は26.0%、そのうち後期高齢者は12.5%を占める高齢化社会となっている。

高齢化に伴い社会は、要介護者が増え、介護者が減る。認知症が増え、独居が増える。この状態を打開するには健康寿命を延伸して、平均寿命に近づけることが求められ、施設中心の医療・介護から、可能な限り、住み慣

れた生活の場において、必要な医療・介護サービスが受けられる、在宅医療の拡充が緊急の課題となっている。

この中で、歯科としては口腔ケアを施すことを通して参画することになる。

現在新潟市には、在宅医療ネットワークが14団体あり、その中で西区には「にいがた西区地域連携ネットワーク」と「西区地域口腔見守りネットワーク」があり、演者はその2つの中で活動している。

ネットワークでは、医師・歯科医師・薬剤師・介護支援専門員等多職種の連携が求められ、その中で歯科衛生士にできること、求められることを日々考えさせられている。すなわち、多職種の中で、顔の見える関係→顔の向こう側が見える関係→顔を通り超えて信頼できる関係の構築が必要となる。

歯科衛生士に求められる在宅高齢者に対する「口腔ケア」を地域の歯科医院、そして当診療所の中で、システムとしてどのように根づかせていくか、皆皆方に理解していただきどのように協力していただくか、思索する毎日である。

第75回（通算第158回）：2015年6月25日（木）

（座長：平澤明美）

義務教育から推考する 実習指導における一考察

丸山 満（歯科技工士学科）

実習説明は、学生が解りやすく円滑に実習に取り組み、到達目標の設定も併せ持った内容であることが肝要である。

前回、実習説明で理解できない学生は補習で個別対応していることを報告した。しかし、個別対応でも、理解不足のままでは実習に行き詰まり、実習に興味を持ってなくなる可能性は否定できない。そこで、実習指導方法を見直すこととした。

現状は、実習開始時から夕方を一つのサイクルとして1日の到達目標としていた。しかし、理解できない学生は実習のつまずきが生じる恐れがあった。それを防ぐ施策として、義務教育における「教育の原理・原則十箇条」を参考に実習指導方法を検討した。

その結果、実習指導におけるPDCAサイクルを“1日”から“一工程毎”に分割し、言葉の短いシンプルで明確な説明とする事で、学生の理解し易さに配

慮した。またそれは、ワーキングメモリが少なくても理解できる実習指導に繋がった。併せて、視聴覚機材を有効に活用することで学生の“視覚”と、教員のデモ模型に触れさせ“触覚”に訴えることでより理解を深めることができると考えられた。

今後もより教育効果が向上する実習指導方法を検討していきたい。

古代エジプトの医師

内田杉彦（歯科衛生士学科）

近代医学の原点とされるギリシア医術が影響力をもつ以前、古代地中海世界において権威を持っていたのは、エジプトの医術であった。約2700年間に及ぶ古代エジプト王朝時代の文字資料には、当時の医術の担い手であった医師たちの名前や肩書きが数多く残されている。彼らのなかには単なる「医師」のほか、医師たちの「長」や「監督官」、王族に仕えた医師などがみられ、階層が存在したことが示されている。また、「眼科医」や「歯科医」のような専門医も存在していた。疾患の治療は、人体の構造や機能についての理解が充分ではなかったため、効果の疑わしい「薬」や呪術に頼らざるを得なかったが、外科治療は観察と経験にもとづいた、当時としては合理的なものであったと言える。

第76回（通算第159回）：2015年7月23日（木）

（座長：山田隆文）

中国歯周病学会参加記

河野正司（明倫短期大学学長）

※詳細については本号総説を参照

第77回（通算第160回）：2015年9月24日（木）

（座長：飛田 滋）

歯冠修復技工学実習における 評価基準の進捗報告

五十嵐雅子（歯科技工士学科）

これまでの実習成績は、各担当教員の採点を平均して評価した。その採点は各担当教員の裁量で行われていたため教員間にバラツキがあり、学生の到達目標が明確にされていなかった。この問題点を解決するために評価基準を検討してきたので経過を報告し